

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：32686

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23255

研究課題名（和文）日本のトランスナショナルな移住者とホスト社会の「社会的結束性」に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Social Cohesion between Transnational Migrants and Host Society in Japan

研究代表者

大野 光子 (Ono, Mitsuko)

立教大学・社会学部・特定課題研究員

研究者番号：70846203

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、研究期間全体を通じて以下3つのサブ課題を設定しプロジェクト全体の調査課題にアプローチした。大久保地区の移民コミュニティの調査では、エスニック・ビジネスを対象にインタビュー調査を実施した。調査の結果、「拒否の経験」が移民の社会参加において積極的な働きかけになっている可能性を検討した。大久保地区のハラルショップの相互行為分析では、第二言語としての日本語がホスト社会においてどのように機能しているのかを明らかにしようと試みた。「国際退職移住」の調査では、日本人高齢移住者のライフヒストリーインタビューを通して、彼らとホスト社会の関わり方、医療・介護等の課題を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の英語圏における移民研究では、トランスナショナルな移住者とホスト社会の関係性を重要視する視点である「社会的結束性」の概念に注目が集まり、彼らとホスト社会の連帯をいかに発展させるかが活発に議論されてきた。日本では、1980年代後半以降外国人人口が急増しその後定住化。彼ら独自のビジネスやコミュニティを発展させてきたが、一方で近隣コミュニティとの関わりが乏しいのが現状だ。そこで本研究は、日本におけるトランスナショナルな移住者とホスト社会の「社会的結束性」について、実証研究から明らかにすると共に「社会的結束性」概念の強化及び発展を目指す。

研究成果の概要（英文）：The following three sub-research questions were established throughout the research period to address the project's research questions. (i) Qualitative research in the immigrant community in the Okubo area. The findings examined the possibility that the 'experience of rejection' is not simply an accelerator of segregation but a factor for positive engagement in immigrants' social participation. (ii) In an interactional analysis of service encounters in the Okubo area, the interaction between shopkeepers and customers during service encounters was videotaped. The study attempted to clarify how Japanese, a second language spoken by immigrants, is used and functions in the host society. (iii) Qualitative research on international retirement migration involved life history interviews with 13 elderly Japanese migrants in Thailand. The study clarified how they interacted with the host society and the challenges of the medical and nursing care and insurance systems.

研究分野：社会学、都市エスニシティ研究、移民研究

キーワード：都市エスニシティ研究 移民研究 トランスナショナリズム 社会的結束性 移民コミュニティ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

トランスナショナルな移住者を扱う研究(以下、移民研究)では1990年代中頃迄、トランスナショナルな移住者(以下、移民)がホスト社会に与える影響に注意が向けられ、ホスト社会側のみを調査対象とするフレームで研究が進められてきた。その後グローバル化の進展に伴い移民の活動パターンが変化するなかで1990年代後半以降、英語圏において「トランスナショナリズム」のフレームで彼らの行動様式を捉えようとする研究が始まり、今日日本の移民研究でも本概念に基づいた研究の蓄積は目覚ましい。「トランスナショナリズム」では、ホスト社会と移民の出身地双方の影響が前提とされており、移民の2国間にまたがった「トランスナショナルな実践」が分析視点として重要視される。一方で近年の英語圏の移民研究では、「社会的結束性(Social Cohesion)」が主要な概念となりつつある。「社会的結束性」は、移民とホスト社会の関係性を重要視するもので、移民の定住や世代が進むなかで彼らがホスト社会とどのように連帯し社会参加していけるのかといった方法の中核を成す。そのため近年英語圏では政策と研究の両面において活発に議論されている。しかし一方でこれまでの研究は、制限的で観念的なものに留まっていることが指摘されており、今後は実証研究からのアプローチが必要だと考える。日本の移民研究では、これまで「社会的結束性」の概念が取り上げられることはほとんどなく、また実証研究の蓄積も皆無と言える。本研究は、こうした日本の状況を打開することを企図している。

日本では、1980年代後半以降、大都市インナーシティエリアを中心に外国人労働者が大量に流れ込み、その後エスニック・ビジネスやエスニック・コミュニティを発展させてきた。しかし一方でそれらが地元商店街や近隣コミュニティとうまく結び付いてこなかったことが指摘されている。以上のことから申請者は、移民とホスト社会の連帯が近年その衰退ぶりが取り上げられてきた近隣コミュニティの活性化に繋がるのではないかと考える。従って、英語圏だけではなく今日の日本社会においても移民とホスト社会の関係性に注視する視点や彼らとホスト社会の連帯を発展させる方法を探り「社会的結束性」の概念を強化することは重要である。

2. 研究の目的

本研究は、移民とホスト社会の関係性を分析する際、近年英語圏で主要な概念となりつつある「社会的結束性(=Social Cohesion)」に着目し、日本における移民とホスト社会の「社会的結束性」について、質的調査を含む実証研究から明らかにすると共に、「社会的結束性」概念の強化及び発展を目指すことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、フィールドワーク、インタビュー調査そして参与観察を含む、質的調査を実施する。インタビュー調査は、半構造化形式で実施しその場でメモを取るほか対象者の承諾を得たうえでICレコーダーにより録音をおこない、音声データを分析に使用する。調査対象は、移民とホストコミュニティで、「連帯」、「一体感」や「社会的包摂」をキーワードとしつつ、両者にどのような関係性があるのか明らかにする。以上に基づき「社会的結束性」概念の強化を試みる。

4. 研究成果

本研究課題は、研究期間全体を通じて、以下3つのサブ課題を設定し、プロジェクト全体の調査課題にアプローチした。(1)大久保地区の移民コミュニティにおける質的調査では、エスニック・ビジネスを営むオーナーや従業員を対象にインタビュー調査を実施した。調査対象者は、ホスト社会において、「受容経験」と共に「拒否の経験」を同時に持っていた。「拒

否の経験」が分離を加速させるのではなく、移民の社会参加において積極的な働きかけの要因になっている可能性を検討した。またそれには、ホスト社会/地域の「よそ者」を中心とした歴史的な発展が重要な要因であることを明らかにした。(2) 大久保地区のハラルショップにおける サービスエンカウンター相互行為分析では、サービスエンカウンターでの店員と客(日本人を含む多様なエスニシティ)のやり取りを一定期間に渡りビデオ撮影した。移民を話者とする第二言語としての日本語が、ホスト社会においてどのように使われまた機能しているのかを明らかにしようと試みた。(3) 「国際退職移住」を対象とした質的調査では、日本人会のインタビュー調査、タイ・チェンマイにおいて、13名の日本人高齢移住者のライフヒストリーインタビューを実施した。彼らとホスト社会の関わり方、医療・介護や保険制度の課題を明らかにした。これらの結果をもとに、トランスナショナルな高齢化社会における、グローバル・マイグレーションとホスト社会の関係性について考察した。以上のいずれも、各対象の調査・分析を通して、日本のトランスナショナルな移住者とホスト社会の「社会的結束性」に関してアプローチするものである。また、これらの研究の成果として次のアウトプットを行った。2021年度、第94回日本社会学会大会(2021年11月)での口頭報告。ISA World Congress of Sociology での英語の口頭報告。また、international journal において2本の論文を出版した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Nambu Satoshi, Ono Mitsuko	4. 巻 22
2. 論文標題 Linguistic landscape of Shin-Okubo, Tokyo: a comparative study of Koreatown and Islamic Street	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 International Journal of Multilingualism	6. 最初と最後の頁 1~19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14790718.2024.2344181	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Ono Mitsuko, Doungphummes Nuntiya	4. 巻 165
2. 論文標題 New Paths for Social Adaptation in Transnational Migration: The Case of a Migrant Community in Tokyo, Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Annals of the Austrian geographical society	6. 最初と最後の頁 199~216
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1553/moegg165-091	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大野光子、古川敏明
2. 発表標題 エスニック・ビジネスのサービスエンカウンターにおける「客」と「店員」の相互行為分析 新宿区大久保地区のハラルショップを事例として
3. 学会等名 第94回日本社会学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Mitsuko ONO
2. 発表標題 International Retirement Migration in Thailand
3. 学会等名 ISA International Sociological Association (国際学会)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------